

夕焼けに写る影の道

1— kkyu

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

天道総司が、ネイティブの地球征服計画を阻止してから、早11年。人間とワームの戦争は、まだ終わっていないかった。今、音速の戦士が、再び目を覚ます。

目次

影の戦士	1
背負う代償、動き出す歯車	23
学園	38

影の戦士

——
大切なモノを、沢山失った。

「父さん…母さん…あ、ああ…ああアアアアア!!」

——
もうこれ以上、失いたくないと思った。

「キミがこれから進もうとしている道は、茨の道だ。賞賛も感謝もされず、だが命を懸けて戦わなければならない、影の道だ。それでも、キミはこの道を選ぶのかい？」

——
だから、俺は選んだ。

「……守りたいモノが……場所があるんです。」

——
仮面ライダーになる事を。

夕焼けに写る影の道

連続失踪事件。

今、新聞やニュースなどで騒がれている、謎の事件。都内で散発的に発生し、失踪した人数は今現在10名。しかもその10名には一切関係性は無く、何の手がかりも無く忽然と姿を消している為、足取りも掴めないままになっている。

この花咲川の町でも、連続失踪事件で騒がれていた。

「ねえ、蘭！3年生の先輩、一人行方不明になっちゃったんだって！やつぱりあの事件なのかな？」

「ひまり、うるさい…。」

「あつはは…相変わらず関心ないなあ、蘭。」

Afterglow。美竹蘭、青葉モカ、上原ひまり、宇田川巴、羽沢つぐみの幼馴染5人で結成されたロックバンド。彼女達が通っている羽丘学園では、三日前に、3年生が一人行方不明になっていた。

連続失踪事件の1人目が学校に出れば、噂にならないわけが無い。今学内では、その話題で持ち切りになっていた。

「でも、ホントに怖いよね、連続失踪事件…。しかも学校で出ちゃうなんて…。」

「まくねく。モカちゃんもすこしくし不安く。」

「いや、モカ…メロンパン食べながらだと全く説得力無いから…。」

スタジオ練習を終えて、5人で帰る帰り道。彼女達もまた、その噂で話題が持ち切りになっていた。約一名を除いてそれぞれ不安そうな面持ちになっている。それもそうだろう、巷で騒がれている事件が、身近に起こってしまったのだから。

「しかしまあ、何の手がかりも無いなんてなあ……もしかして、幽霊の仕業とか……？」
「だとしても行動力あり過ぎでしょ、その幽霊……。」

しかし、あくまで噂。超常的な事なんてある筈が無い。彼女達はそう思いながら、何時もの帰り道を歩く。その道の先で、未知の存在に遭遇するとも知らずに。

「A小隊！前面で弾幕を張れ！B小隊はA小隊の援護を！」

町外れの廃ビル。その一角で、その戦いは人知れず行われていた。

「顔面を狙え！絶え間無く撃ち続けろ！ライダーが到着するまで持ち堪えるんだ！」

「くっそがああ！死ねバケモノどもお！」

「中井がやられた！救護班！早く！」

フロア中に絶え間無く響く銃声。落ち続ける葉莖。そして、怒号と悲鳴。普段静かなその廃ビルは、まさに死屍累々の戦場と化していた。

『ワーム』

それは、18年前に渋谷に飛来した隕石と共にやって来た、宇宙からの侵略者。その異形は、人間を遥かに凌駕する戦闘能力を持ち、それをもって人間を殺害し、その人間に擬態する。

そう、世間を騒がせている連続失踪事件は、ワームによるモノだ。フロアの端には、羽

丘学園の制服を着た、行方不明の生徒の死体が無惨に転がっている。しかし、それに構っている暇は無いと言わんばかりに、銃声はまた鳴り響く。

「作戦本部より連絡！ライダーの到着、およそ2分！」

「何としても持たせるんだ！外に出せば一般人に被害が出るぞ！」

「ぐああっ!!」

「久本お！クソがあああ!!!」

一人、また一人と、戦う者達が倒れていく。

ワームと戦う彼等は、『NEO ZECT』。ワーム出現当初に発足された組織、ZECTが解散し、再編成された組織。ワームに唯一対抗出来る、『マスクドライバー』を中心に、ワームの殲滅を担う組織である。しかし、マスクドライバーになれるのは、『ゼクター』に適合した人間のみ。限られ過ぎた戦力を補う為に存在するのが、今戦場で戦っている、『ゼクトルーパー』である。

作戦開始時に20名居た彼等は、既に半分以下に減っていた。対して、ワームは…サナギ体が5体。開始時から減っていない。全滅は時間の問題であった。

「隊長！もう既に限界です！」

「泣き言を言うな！此処で我々が止めなければ…！」

「隊長、前っ!!」

5体の内の1体が、隊長…菅野に躍り掛る。

完全に隙を突かれた。ヘルメットの中で目を瞑り、死を覚悟する。

（俺も…ここまでか…。あーあ…息子を遊園地に連れてく約束、果たせねえじゃねえか…くそ…!!）

その禍々しい爪が、BDUの装甲を引き裂こうとした。しかし、菅野の覚悟は杞憂に終わる。

ズガンツ!!!

明らかにトルーパーのライフルとは違う、鈍く叩く音。何処からか飛来したその黒い

カブトムシが、ワームを弾き飛ばしたのだ。

そして、そのカブトムシと共に、走り来る一人の少年。

「遅れてすみません！後は俺がつ！」

「すまない、助かった！……後は頼んだぞ！新道！」

ゼクトルーパー達の前に出る、新道と呼ばれた少年。周囲を飛ぶカブトムシを手で捉える。そして、ソレを腰に巻いている銀の機械のベルトに、装着した。

「変身ッ!!」

『HENSHIN』

無機質な機械音声と共に、少年の身体が無骨な装甲で覆われる。

少年の名前は、新道しんどう開人かいと。NEO ZECTに存在する二人のマスクドライダーの内の一入、ダークカブトゼクターの適合者である。

「はあッ!!」

隊長に襲い掛かっていた1体を力を込めて殴り飛ばす。現在のフォーム、『マスクドフォーム』はパワーと防御力に秀でており、一撃一撃が重い。殴りつける鈍い音と共に、ワームが吹き飛ばされる。それを皮切りに、その他のワームが襲い掛かってくる。

腰のゼクトクナイガンを取り、アックスモードに変形。走り来るワームを迎え撃つ。

「ふんッー」

振りかぶって来た腕を片手で受け止め、空いた胴体をアックスで斬りつける。斬撃音と共に、金切り声に似た鳴き声を上げる。その隙にと言わんばかりに、残りのワームが襲い掛かる。

背後の1体を後ろ蹴りで蹴り飛ばし、後ろに続いていたもう1体諸共飛ばす。残った1体の繰り出した上段の攻撃をウイーピングで躲し、ボディに一撃。身体がくの字に曲がった所にアックスで斬撃を加える。

それぞれ体勢を崩したワームに追い討ちをかけるように、アックスモードからガンモードに変形、二発ずつ弾丸を見舞う。

ふと背後を見遣れば、ゼクトルーパー達が撤退を始めていた。せめて撤退し終えるまでは、と起き上がろうとするワームに更に弾丸を撃ち込んだ。

怪我人を含め、フロアから撤退した様子を確認すれば、再び体勢を整えたワーム達と向き合う。ゼクトクナイガンを腰に戻し、ベルトのダークカブトゼクターの角を、反対側に切り替えた。

「キャストオフ!!」

『CAST OFF』

無骨な装甲が周囲に弾け飛び、その衝撃で再びワーム達が吹き飛んだ。中から現れたのは、赤黒い装甲。胸元に格納してあった、カブトムシの角が、ヘッドスキンに合着する。

『CHANGE BEETLE』

仮の姿のマスクドフォームから、真の姿の『ライダーフォーム』が姿を現す。腰のゼクトクナイガンをクナイモードへ変形させ、逆手持ちで構えた。

「——ッ!!」

呼吸を整え、集中力を上げる。迅速に、少ない手で敵を蹴散らす為に。クナイにエネルギーを集中させ、敵が仕掛けるのを待つ。

幾秒かの空白の後。痺れを切らした1体がこちらに向かい走り出し、それに続く様に他のワームも走り出した。

それに合わせ、クナイを構え駆け出した。

—— 1体目。大きく振りかぶる瞬間に、空いた腹部を辻斬りの如く斬り去る。

—— 2体目。顔目掛けて突き出した爪を、顔を逸らすことで回避。袈裟斬り。

—— 3体目。下段から振り上げてくる手を上げられる前に片手で止め、そのまま突

き刺す。

—— 4体目。やられたワームごと纏めて引き裂こうと上段に振り上げてくる。即座にクナイを引き抜き、ターンする様に回避、勢いを利用してそのまま背後にクナイを突き刺した。

一瞬の剣戟の後、4体のワームが爆散する。しかし、1体だけその場を動かなかったワームが残っている。ソイツに目を遣った瞬間、通信が入る。もうパターンで分かっていた。この感じ、熱気は間違いなく…。

『ソイツの体内温度が急激に上昇している！脱皮するぞ！』

「分かっています……！」

開人は来るであろう次の形態に身構えた。

サナギ体の表皮が、マグマの様に煮えたぎり、溶け崩れる。中から現れたのは、蜘蛛の様な模様の成虫体。

『アラクネアワーム……その模様はルボアか！』

「しかし単体です……この場で仕留めます……！」

アラクネアワームは集団になればこそ厄介ではあるが、単体では大きな脅威ではない。やるならば……今だ。

アラクネアが腰を低くして、溜めるような動作を見せる。これも予測できる。

ゼクトクナイガンを戻し、こちらも腰を低く構え、ベルトの横に付いているタツチボ

タンを押した。

「クロックアップ!!」

『CLOCK UP』

瞬間、自分の見える世界が、アラクネア以外停止する。タキオン粒子が身体中を駆け巡り、時間流が自分の体感で動き出す。

再び集中し、相手が仕掛けるのを待つ。

—— アラクネアがこちらに向かい走り出す。横薙ぎの右フックが飛んでくる。左手でガードし、カウンターの右ストレート。ベルトのボタンを押す。

直撃、アラクネアが仰け反る。顔面が逸れた隙に、右脚で腹部に前蹴り。同時にベルトの1番目のボタンを押す。

『ONE』

直撃、距離が開く。すかさず距離を詰める。アラクネアが反撃の左ストレート。

ダッキングで回避、空いた顔面を狙ってカウンターの左アッパー。空いた手で2番目のボタンを押す。

『TWO』

直撃、顎がカチ上がる。隙を逃さず左脚で足払い。

直撃、アラクネアが地面に倒れ伏せる。その隙に最後のボタンを押す。

『THREE』

起き上がるうとするアラクネアを、右脚の踵落として抑え込む。切り替えていた角を元に戻した。

「ライダーキック……！」

『RIDER KICK』

もう一度、角を反対側に切り替える。瞬間、タキオン粒子が右脚に集中する。そして

……

「はあッ!!!」

そのまま、踏み潰した。アラクネアは爆発四散し、跡には衝撃でひび割れた床と、蒼白い炎だけがユラユラと揺らめいていた。

『CLOCK OVER』

ベルトの無機質な音声と共に、周囲の時間が再び流れ出す。集中状態を戻し、マスクの中で、ふう、と一息ついた。

「ワームの反応は？」

『ああ、今ので全て…いや、待て！まだ1体隠れている！』

「ッ!？」

再び周囲をセンサーで見渡す。しかし、時既に遅し。残ったサナギ体1体は、窓ガラスを割ってビルから飛び降りた。

「ちっ！逃がさない…!!」

その後を追うかのように、自身も窓から飛び降りた。

蘭たち5人は、夜の帳に静まり返った住宅街を、談笑しながら歩いていった。

「も〜！モカつてば酷いよ〜っ!!」

「にへへ〜 ♪」

何時も通り、モカがひまりを弄り、それにひまりが反応して、それをつぐみが諫め、その遣り取りを巴と一緒に笑う。

何ら変わらない日常だが、この日常が蘭にとっては何よりも大切だった。

こんな日常が、この先もずっと続けば良いのに。今の5人でずっと一緒に居れば良

いのに。

しかし、現実には非情にも彼女達に牙を剥いた。

先の曲がり角から、突然緑色の異形が躍り出てきたのだ。一番に気がついたのは、蘭だった。

アレはヤバい。

あの存在の事を知らなくても、彼女の本能が告げていた。先頭を歩いていた蘭が右手で皆の進行を止める。

「何……あれ……」

「ん？どうしたんだ蘭、急に立ち止まっ……ッ!?」

次に気がついたのは巴。それで他の3人も気が付く。全員の背筋が凍り、息を飲んだ。

「ね、ねえ…逃げよ…!？」

ひまりが口を開いた瞬間、その異形は声に気付いたのか、こちらを向いた。嗚呼、拙い。このままでは、殺される。

身体中が震えている。逃げたい。だけど、脚が震える。

しかし、そんな彼女達を、異形は待つてくれない。こちらに目掛けて、奇妙な声を上げながら走ってくる。

ダメだ、逃げられない。…せめて、他の4人だけでも。

蘭は異形の方を向いて手を広げた。まるで、彼女達を守るかのように。

ギョツと目を閉じ、己の命の終わりの瞬間を、震えながら待った。…しかし、それは来ることは無かった。

『CLOCK UP』

「斃れ…!」

一閃。クナイの軌跡が駆け抜け、それは正確に異形の頭部を斬り裂いた。

断末魔の叫びを上げて、異形…ワームは爆散した。

『CLOCK OVER』

間一髪だった。後少しでも遅ければ、彼女の身体は異形により引き裂かれていただろう。人を襲っていると断定した時点で走り出して良かった。

クロックアップを解き、マスクの奥で、やっと一息つく。

「ワーム、殲滅しました。一般人に怪我は有りません。」

『ああ、こちらでも確認した。すまない、まさかもう一匹いるなんて…。』

「いえ、問題ありませんよ、加賀美さん。結果的には殲滅出来…ッ!？」

『ん？どうしたんだ開人？』

目を疑った。

自分が守った一般人は……あの日、何も言わずに、自分勝手に残して来てしまった、幼馴染達だった。

言葉が出ない。息を呑んだまま動けない。彼女達を見詰めたまま、立ち尽くしてしま
う。

『もしもしー！開人ー！』

「——ッ。すみません、帰投します。」

加賀美さんの声で、漸く硬直から我に返る。

——決めただろうが、あの時。影でみんなを守るって。今更何揺らいでんだ。
心の中で自分で言い聞かせる。彼女達に背を向け、歩き出す。

「——ま、待って！」

しかし、呼び止められてしまった。

ダメだ、足を止めるな。止めたら振り返ってしまう。これ以上、決意を揺らがせるな。言い聞かせる。何度も。何度も。

「……アナタは、何？」

言ってしまったよ、自分は『新道 開人』だと。心の暗闇の底で、何か甘く囁いている。ダメだ、口を開くな。

…一言だけなら、良いのかも。

「——…カブト。」

『CLOCK UP』

そう一言だけ残し、高速の世界へ消えていった。

——噫、俺は。まだこんなにも、弱い。

背負う代償、動き出す歯車

「——新道開人、帰投しました。」

「ああ、お疲れ！済まないな、本当なら俺が出るべきだったんだが……」

—— NEO ZECT 作戦拠点

先程戦闘が行われていた廃ビル近くに設置された、急増の司令部。データ収集の為に機材を大量に積んだバンに、ゼクトルーパー達を輸送する為の装甲車が、其処に所狭しと並べられていた。

その司令部のテントに、新道は帰投した。其処には、モニターと睨めっこをしている男が一人。

NEO ZECT 作戦指揮官、加賀美^{かがみあらた}新。NEO ZECTに所属するもう一人のマスクドライバーであり、ガタックゼクターの資格者である。

彼は元々ZECTのライダーであり、解散と共に普通の警察官に戻る予定であったが、未だ暗躍しているワームに対抗すべく、NEO ZECTの作戦指揮官兼ライダーになった。いや、なるしかなかった、と言った方が正しいのかもしれない。

今現在、マスクドライバーとして戦っているライダーは、新道と加賀美のみ。カブトゼクターの資格者、天道総司は音信不通で何処に居るか分からず、ホッパーゼクターの資格者、矢車想は行方不明。ドレイクゼクターの資格者、風間大介は、協力者という立場ではあるが、本業のメイクアップアーティストを優先している為、何時でも戦えるワケではない。他のザビーゼクター、サソードゼクターは資格者が死亡している為に使えない。

故に、今のNEO ZECTは事実上二人で戦っている様なもの。今回の様な、現場にライダーが間に合わない事例は、珍しい事では無かった。

「ゼクトルーパー隊の被害は…」

「……今回の戦闘に参加した20人中、4人死亡、3人重症、他13人は軽傷だ。」

「——ッ。」

死亡者が出た。その事実、開人の胸を締め付ける。ゼクトルーパー隊は謂わば足止

め係。やられる事を承知で戦う、歩兵。死者が出る事は珍しくない。最悪の場合全滅も有り得る。ライダーが少ない分、彼等が命を張って戦うしかないのだ。

開人がもう少し大人であれば、割り切っていたのかもしれない。しかし、彼はまだ17歳。人の死…それも、つい昨日まで楽しく談笑していた、自身に近い人間の死は、簡単には受け入れられない。

もつと俺が早く到着していれば、助かっていたかもしれない。そう考えてしまえばしもうほど、苦しくなる。彼が若くして背負った、命の重さであった。

「…開人、お前はベストを尽くしたんだ。逆に考えてみる。お前が来てくれたから、16人は助かった。それは、確かにお前が救った命なんだぞ？」

「…それでも、4人救えませんでした。」

加賀美にも、命の重さに耐えられなくなった過去がある。故にその苦しみは同じ様に理解出来る。現に32歳になった今でも、命が失われる事には慣れない。否、慣れてはいけない。

だから少しでも背負う荷を軽くしてやろうと、加賀美も不器用なりにフォローを入れるが、それで納得してしまうほど、新道開人という人間は簡単ではない。

……特に、守る という目標を掲げてライダーになった、開人にとっては。

「……菅野さんの所に行つてきます。」

「ああ。…遅くならないようにな。お前、明日羽丘学園に編入だろ？準備とかでバタバタするなよ。」

「……ありがとうございます。」

そう一言だけ残すと、ゼクトルーパー隊のテントへ向かった。その背中が、暗く、重苦しく…そして、悲しげだった。

「おう、お疲れさん、新道。」

「…ええ、ありがとうございます、菅野さん。」

ゼクトルーパー隊の隊長 菅野は、テントから離れた所に居た。其処には、今回の戦闘で亡くなった4人が、身体を白い布で包まれた状態で横たわっていた。壮絶な死だったのだろう、布に血が滲んで、殆ど赤くなっている。そんな彼等の前でも、菅野は悲しむ素振りを見せずに、開人に接した。

「…死んだのは、中井、久本、湯川、西郡だ。中井は、さつき息を引き取った。」

「…ッ。すみません…俺がもつと速く到着していれば…」

「過ぎた事を言っても仕方ねえだろ。どんなに悔やんでも、コイツらはもう二度と目覚める事はねえんだ。」

菅野の一字一句が、深く深く、心に突き刺さる。菅野横に並び、二度と口を開くことも、目覚めることも無くなった人達の前に立った。

ライダーとしてこれまで戦ってきたが、この光景は何時まで経っても慣れない。

「……お前が居なかつたら、多分俺も死んでいた。全滅していただろうな。…救った命の方が多いいんだ、胸を張れよ。逝っちまったコイツらの為にも。」

「……出来ませんよ。救えなかった命の前で、胸を張るなんて。」

訓練の時から良く接してもらった中井さん。お前は身体が細いから、と 筋トレを沢山教えてくれた久本さん。訓練漬けどイヤになるだろ、と 色んな所に連れ回してくれた湯川さん。男ならメシくらい作れる様になれ、と 料理を教えてくれた西郡さん。

皆昨日まで笑って話してたのに、今日の前にいるのは、物言わぬ屍。

唇を噛み締める。血が出るのではないかという程、強く、強く。己の無力を悔いる。そんな開人の頭を、ワシヤワシヤと雑に撫でる菅野。

「……せめて、俺達の手で盛大にあの世に送ってやろうや。その方が、コイツらも喜ぶ。」
「……はい。」

この日で、開人がライダーになって以降失われたゼクトルーパーの命は、32人になった。

後日、隊長の菅野の手によって、NEO ZECT内で彼等の葬儀が盛大に行われた。死んだ4人の英雄を、盛大に讃えるかのように。

夢を見ていた。

それは、自分が両親を亡くした、あの日の夢。

目の前に横たわるのは、胸を指し貫かれた母と、ズタズタに引き裂かれた父。

その横に立つのは、その身体を鮮血で濡らした、漆黒の異形。

異形は、俺を見詰める。気分はどうだ？と嘲笑うかのように。

異形は、俺に歩み寄る。次はお前の番だ、と言わんばかりに。

そして、異形は——

目が覚めた。何時もの天井、何時もの部屋、何時もの朝日。そして、あの日の夢。

何時も、同じ所で目が覚める。アイツに殺される瞬間に。きっとこの夢は、アイツを

殺さない限り、ずっと見続けるのだろう。

何にせよ、この手で決着はつけなければならぬ。まだ覚醒しきっていない身体をベッドから起こしては、自分の部屋を出た。

「おはよう、開人！おつ、制服よく似合ってるぞ！」

「…ありがとうございます。おはようございます、加賀美さん。」

リビングに向かえば、其処にはエプロンを着けた加賀美が朝食を用意していた。

開人はNEO ZECTに所属して以降、加賀美と寝食を共にしている。最初は一人暮らしをするつもりでいた開人であったが、生活面が心配だから、と加賀美が無理矢理保護者の席に収まった。無論開人は遠慮したのだが、情に厚く熱血漢な加賀美に折れるような形で、今に至っている。

テーブルの上には、トーストとサラダ、目玉焼きにソーセージが綺麗に配膳されている。独身男性が作ったとは思えない程しつかりとした朝食。元々料理には疎かった加賀美だが、ちゃんとしたメシを食わせるため、と必死に覚えたのだ。最初こそ不格好な食事ではあったが、今では主婦顔負けの腕前になっている。勿論開人もゼクトルーパールの西郡から教えてもらった腕がある為、最近では当番制で料理を作っている。今日は

加賀美が当番だ。

「いただきます！」

「いただきます。」

食卓につき、しつかりと手を合わせてから食事に手を付ける。これは開人の死んだ両親からの教えだった。今でも忘れずにやっている。

「そういえば開人、お前が通う高校って、元々住んだ所の近くだよな？前に言ってた幼馴染達、一緒に学校だと良いな！」

食事に手を付けながら、何時も通りのテンションで喋り掛けてくる加賀美。それに開人は、苦笑いしながら答える。

「そうですね……でも、アイツらが何処の学校に行ったかなんて、俺は知りませんから。しかも、一個年下なので、同じ学校でも殆ど会うことは無いと思います。」

「分からないぞ？若しかしたら、”小さい頃からずっと好きでした！”なんてのがあ

かもしれないからな！」

本当に朝とは思えない程のテンションの高さである。

「でも、関わるつもりは無いです。あの時、俺は何も伝えずに居なくなりましたから。それに……ライダーである俺に関わるのは、危険です。」

「そ、そうか……なら、仕方ないな！」

そう、これは開人の決意。己がライダーとして、影から皆を守る為につけたケジメ。もし話すことになっても、突き放すつもりでいる。覚悟を揺らがせるつもりはない。流石にこれには加賀美も閉口した。

他愛も無い話をしながら、朝食を食べ終わり、加賀美は出勤、開人は登校の準備。事前に買った教材をバッグに詰め込む。勿論、いざという時の為のベルトも忘れずに。

今日は駅まで送って貰える事になり、加賀美と一緒に家を出て、車に乗る。

「もしワームが現れたら、お前の腕時計型端末に直接データが届く様になってる。バイ

ブレイションのリズムは、

「トン、ツー、トントントン、ですね。覚えています。」

「よし、なら安心だな！学校裏にダークエクステンダーを置かせてもらってるから、それで出勤してくれ！」

車の中で諸々の確認を済ませながら駅へ向かう。ロータリーで降りてもらえば、

「高校生活、しっかり楽しんでこいよ！あ、彼女とか出来たら俺にも報告よろしく！」

などと捨て台詞を吐いて、加賀美は出勤していった。朝の会話を覚えていないのだからか、と思わず溜息を吐く。しかし、その底抜けの明るさに、元気を貰える。遠くなくていく車の影を見届ければ、駅構内へ入っていった。

Afterglowの5人は、朝から一緒に登校していた。しかし、その表情に笑顔は無い。それもその筈、昨日の超常的な出来事は、忘れられずに5人の脳裏にこびりついているのだから。

「…昨日のアレ、一体何だったんだろうな。」

巴が口を開く。明らかに不安が残っている口振りである。

「ん〜…、映画の撮影…は有り得ないよね〜…あのバケモノ、爆発して消えちゃったし〜。」

「うん…それに、あの”カブト”って名乗ってた鎧の人…。」

『カブト』。確かに去り際にそう名乗っていた。まるで、テレビに出てくるヒーローをそのまま連れ出したような、赤黒い鎧で覆われた、謎の存在。5人の中には多くの疑問が残ってしまった。

急に誰も喋らなくなってしまうた5人。この空気を変えるべく、リーダーのひまりが口を開いた。

「よしっ！昨日の事は取り敢えずまた今度考えよ？この話題だとずっと暗いままになっちゃうし！」

「そだね〜。ひーちゃんイイこと言うじゃ〜ん。」

流石ムードメーカー、としか言うほか無い。ひまりの一言で、5人の雰囲気は自然と柔らかくなった。

「あ、そういえば。今日は転入生が来るらしいぜ？」

「転入生？……何でこんな時期に。」

突然巴の振った話に、蘭は疑問符を浮かべる。

それもその筈。今は7月の下旬、本来転入の時期は学期初め。この時期に転入など不自然にも程がある。

「さあ…アタシもクラスの子が噂してんのを小耳に挟んだ程度だしな。」

「ねえねえ！その転入生って男子かな!?女子かな!？」

「何か男子だつて言つてた気が…」

「よしっ！みんなで休み時間に見に行こうよ！」

「ええ……。」

食い気味に反応してきたひまり。蘭を始めにそれぞれが微妙な反応。彼女達が親しくした男子など、一人しか居ない。あの日何も言わずに居なくなつた、開人の事しか。

「えく!?でも興味無いわけじゃないでしょ〜！」

「まあ、どんな人かは確かに気になるけど…」

「なら決定！2時限目の休み時間に集合ね！」

優しいつぐみが微かに同意の意を見せた事で、強引に持つていかれる。またか、と蘭は溜息をついた。そんな会話を繰り返しながら、学校へ向かうのだった。

今、彼と彼女達は再び巡り会う。

一人は影として。

五人は煌めく太陽として。

—— 運命の歯車が、動き出す。

学園

— NEO ZECT 総本部

「おはよう、加賀美君。」

「おはようございます、八重樫さん！今日もデータ解析、よろしく頼みます！」

警視庁地下8階。メディアにも公にされていない秘匿されたフロア。NEO ZECT総本部のあるそのフロアから、更に一階地下に下りたフロア、NEO ZECT研究開発部に、加賀美は訪れていた。

「…で、どうですか。ブラックボックスの解明の方は？」

「ダメだな。完全にシャットアウトされている。ハッキングも矢張り全部突っぱねられた。」

「そう、ですか…全く、どうなってるんですかこのゼクターは…。」

大量のモニターに囲まれた部屋、更にその中央の強化ガラスのケースの中に存在する、一つのゼクター。

新道開人を資格者として選んだ、ダークカプトゼクターである。

ダークカプトゼクターは、11年前、天道に擬態したネイティブが装着していた試作品のゼクターである。しかしそれは、装着者本人と全人類ネイティブ化計画の黒幕である根岸と共に、燃え盛る炎の中に消えた筈であった。実際に、焼け跡を調べて、復元不可能なまでに壊れたダークカプトゼクターとベルトが見つかっている。

しかし、目の前のゼクターは、4年前の8月23日…あの事件の日。当時中学一年生の開人の目の前に突然現れた。試作品から完成品へと変わり、膨大なデータを詰め込

んだブラックボックスを内包して。

加賀美をはじめとする研究開発部は、このゼクターの研究とブラックボックスの解明に、実に4年もの時間を費やしてきた。

しかし、研究は思う様に進まず、ブラックボックスのデータは解明されないまま、今に至っている。

「我々が知るプロトタイプのダークカプトゼクターと違い、今現在存在するどのゼクターよりも高性能であり、更に謎のブラックボックスを内包している……研究者の私からすれば、未来から来たオーパーツとしか思えないよ、これは。」

研究開発部の主任である八重樫は、苦虫を噛み潰したような表情で、そう語る。自分達が血の滲む思いで作ったモノを易々と越えられたのだ、無理も無い。

「あーくそっ！打つ手無しかあ！」

加賀美は加賀美で、頭を掻きながら苦悩の声を漏らしている。しかし、八重樫は長い間ゼクターの研究開発を担ってきた人間。転んでもタダでは起きない。

「……そうでも無いんだな、これが。かなり断片的ではあるが、ブラックボックスから幾つかのワードを拾う事ができた。」

「ほ、本当ですか!?!」

「ああ、コレを見てくれ。」

八重樫はニヤリと笑みを浮かべせながら、手にあるノート型端末を操作し、一つのページを見せる。それは、強固なブラックボックスからやつとの思いで抜き取った、僅かなデータであった。

「……拾えたワードは、『カプティクゼクター』『type: NEXT』『OVER B OOST SYSTEM』……この三つのみだ。コレが何を意味するのは、未だ分かっていない。」

「十分ですよ八重樫さん！大きな一歩ですよ！」

4年の間、まるで進歩の無かったブラックボックスの解明。僅かではあれど、立派な一歩。加賀美はまるで自分の事のように喜んだ。

「まだまだ大量の未解領域が残っている。我々はこの研究を進めるから、ワームへの対応は君たちに任せるよ、加賀美君。」

「任せてください！身体を使うのは、自分達の仕事ですから！」

……後に、このデータが地球の運命を左右するという事を、彼等はまだ知らない。

新道開人が羽丘学園に転入する理由は二つある。

一つは、最近起こっているワームによる連続失踪事件である。11人目の犠牲者がこの羽丘学園で出たが、未だに他の犠牲者が見つかっていない。

この状況を見兼ねた参謀本部が、ここ周辺でワームが出現する可能性が高いという結論を出し、ワーム出現に即座に対応出来るように、開人を転入生という形で常駐させるようNEO ZECT総司令から命令が下った。

しかし、それなら普通に花咲川で生活させるだけで良いのではないか、という意見も出た。これをゴリ押したのが、作戦指揮官の加賀美新と総司令の田所修一である。

開人は、中学一年の時に資格者に選ばれ、中学の三年間を戦闘訓練に費やし、15歳…本来ならば高校に通っている筈の時間を、NEO ZECTの戦闘員として過ごした。

二人は、まだ若い開人をNEO ZECTに入れた事を、仕方ない事とはいえ後悔していた。まともな青春を送らせずに、戦いの世界へ駆り立てた事を。

故に、今回のこの参謀本部が出した結論を機会に、開人の生まれ育った町で高校生活を送らせようと、二人で結託して計画し、無理矢理意見を通したのだ。

…最も、全てを捨てる覚悟を決めて町を出た開人にとって、迷惑な話であったが。

これが二つ目の理由。身内の完璧な私情とお節介。見事に振り回されている開人であつた。

真新しい制服を身に纏い学校へと入つた開人は、現在非常に困つた状況に出くわしていた。

転入生に良くある、職員室が分からないとか、そういうものではない。それは来客用出入口から入校したので、事務員の人に場所を聞いた。

では、何に開人が苦しんでいるのか。

そう、道行く生徒に注目されているのである。

「ねえ、あの人誰だろう…」

「うわ、何あの格好良い人…いや、格好良いというより、綺麗？」

「え、ていうかアイツ…男？女？…でも、制服は男子だから、男だよな…いや、男装という可能性も……」

勘弁してくれ。俺は客寄せパンダになる為に学校に来たワケじゃない。あと、最後の男子、キミはマンガとアニメの見過ぎだ。

廊下を行く生徒が、男子女子関係無くこちらを見ながらヒソヒソ声で話している。正直、ツライ。

開人の容姿は優れている。それも、メイクアップアーティストの風間が認める程に。季節に逆らった白い肌に、前髪を右に流した群青色の髪。長い睫毛に切れ長の目。男性と言われても女性と言われても通用する、美人であった。

以前風間に初めて会った時、いきなり手を両手で掴まれて、メイクさせてほしいと頼まれた事があった。男性がメイクの必要など、と思っている開人にとって要らない話であったので無断断ったが、アプローチは未だに続いている。

転入生というだけで注目されるというのに、容姿が重なれば謂わば当然の事と言え

るだろう。しかし、余り注目される機会が無かった開人にとって、この状況は地獄であつた。

ヤバイ、この場に留まるのは不味い。

歩くスピードを更に速めて、職員室へと向かうのだった。

職員室

二度ノックし、中へと入る。

いたって普通の職員室。しかし、職員会議の後なのか、座っている教師は、皆書類と睨めっこしている。とりあえず、一番近くに居る教師に声を掛ける事に。

「…失礼します。本日付で転入する新道ですが、理事長先生はいらっしゃいますか？上の者から、挨拶する様に言われているのですが。」

「ツ!?は、はい！少々お待ち下さい！」

焦った様な、驚いた様な反応を見せれば、職員室の奥の部屋…理事長室であろう部屋へと足早に駆けていった。

その瞬間、職員室に居る教師達が、一斉に開人に視線を向ける。

コイツが例の…、とでも言いたげな視線。どうやら、あまり歓迎されてはいないようだ。

しかし、これは開人の予想通りであった。

今回の転入は、政府からの直接的なお願い。

いや、お願いはあくまで建前。学校側からすれば、命令に等しい。

勿論、NEO ZECTやワーム、マスクドライバーの様な機密事項は全て伏せてある。しかし、誰も事情を知らないというのは納得がいかないだろうと、事前に加賀美から、理事長と校長、更に自分のクラスの担任にだけは事情を把握して貰っている。勿論、口外禁止で。

しかし、その他の教師については別である。それに関しては、政府からこう伝える様

に命令されている。

内容は、簡単に言えば『彼は政府の勅令で重要な仕事を請け負っているので、極力彼に協力するように』だ。

事情を知らない教師からすれば、いきなり爆弾を渡された様なものである。いい顔をされないのは寧ろ当然と言っても良い。

ああ、だからあの反応か、と内心で納得すれば、先程の教師が理事長室から出てきて、再び足早に駆け戻って来た。

「理事長が此方でお待ちですので、ど、どうぞお入りくださいー！」

「分かりました、ありがとうございます。」

その教師に連れられて、理事長室に通される。中で待っていたのは、理事長らしい恰幅の良い男性が一人、その両隣に、教師らしい初老の男性と、二十代であろう若い女性が立っていた。

「お待ちしておりました。羽丘学園理事長、秋山憲仁です。」

「新道開人です。本日からお世話になります。あと、私は今日から指導される立場ですので。敬語等使わず、普通に接して頂いて結構です。私としても其方の方がありがたいので。」

「…そ、そうかね？…コホン、では、お言葉に甘えて、そうさせてもらおうかな。」

理事長 秋山と握手を交わす。重要人物という事に緊張しているのか、表情には出ないが掌が若干湿っている。手汗でもかいていたのだろうか。

開人としても、緊張されたままでは話にならないと思い、生徒として接して貰うようにお願いをする。

その言葉に若干安心を見せたのか、敬語が取れる。

「政府の方から、事情は聞いているよ。学校側も、最大限協力するから、キミは安心して勉学に励んでおくれ。…おっと、紹介が遅れたね。右の先生が、青井先生。この学校の校長先生だ。」

「校長の青井です。これから宜しく。」

「左の先生が、佐々木先生。キミが転入するクラス、2—A組の担任の先生だ。困った事があれば、何でも彼女に言ってくれ。」

「担任の佐々木です。出来る限り新道君の力になるから、何でも言っただけ？」

「…はい、宜しく願います。」

二人とも握手を交わす。どうやら、根回しはしつかりとなされている様だ。

「それじゃあ、もうすぐ朝のホームルームが始まる。後は佐々木先生に任せてあるから、以降は彼女に。それじゃあ先生、よろしく頼むね。」

理事長がそう話を締めくくれば、佐々木先生と一緒に理事長室を出た。

「それじゃあ、私が呼んだら中に入って来て。」

「分かりました。」

—— 2—A組 教室前

騒がしい教室の中へ、佐々木が入っていく。

開人は呼ばれるまでの間、廊下の壁に寄り掛かり、加賀美から渡された腕時計型端末を眺めながら、今朝の加賀美の言葉を思い返していた。

もしかしたら、この学校に蘭たちが居るのかもしれない。

有り得ない話では無い。昨日この町で起こったワームとの戦闘で、彼女達の姿をこの目で見たのだから。

それにしても、大きくなっていった。自分の知る小学生の頃とは、まるで別人だった。

ちやんと五人とも一緒だった。きっと、今もみんな仲が良いままなんだろうな……良かった。

様々な思いが、開人の心を巡っていく。

しかし、それ故に開人の心を苦しめる。

蘭たちに会えば、自分の手で突き放さなければならぬ。

もしそうなってしまった時、本当に自分に出れるのか。ずっと一緒にいたみんなを突き放すなど。

……出来る出来ないの問題じゃない、やらないといけないんだ。蘭が、巴が、モカが、ひまりが、つぐみが、みんなが大切だからこそ。

「それじゃあ新道君、入って来て。」

「……はい。」

「じゃあ、自己紹介、宜しくね。」

……俺が影で、守らないといけないんだ。

「今日からこのクラスに転入する、新道開人です。中途半端な時期の転入になりましたが、宜しくお願いします。」

